

# 遊び中心の保育における

## 記録について考える

### —個人記録とボード記録—

近藤千恵子

「遊び」の誕生には、子ども自身が自分のものとして使うことができる時間と空間の保障が大切でしょう。

少し遊ぶと「集り」であったり、遊びと称して何かさせられたりするのではなく、まんとみ幼稚園の時間は実にはたつぷりとゆったりと流れています。そこで、なかなか遊びが見つからない時も、途中でけんかをした

時も、うまく友だちと遊ぶきっかけをつかめない時も、少し時間をおいてみると見つかったりやり直しができたりする。これはいいなあと思います。

#### 保育者の役割

それでは保育者はどのような役割をもとうとしてい

るのでしょう。

たとえば、朝、子どもがお母さんと離れるのがつらかったり何か悲しい気持ちになっている時、我慢させようとか頑張つて乗り越えさせようとするのは私たちの役割ではありません。その子どもの心を察し私たちの心を添わせて一緒に感じていたいと思います。泣きやませようとするのではなく、泣かすにはいられない気持ちを分かりたいのです。自分の好きな場所や居心地のよい場所を見つけてそこにいられるように準備しておきたいし、おんぶや抱っこをしていると子どもだけではなく私たちも心地よいのだということに気づきたいと思います。そうこうしているうちに子どもの気持ちの内から元気になってきて何か楽しいことをしたいなあと外へ向いてきた時、一緒に「よかったね」と心を弾ませたいのです。

たとえば、くしてはいけなとか、くしなればいけないということがいろいろあると、子どもは自分の中にふつと生まれた「これ、なんだろう?」「あつ、

おもしろそう!」といった興味、意欲、感性の芽をふくらませることがないままに通りすぎてしまうと考えます。くしたらダメだなあや、くをしなくちゃ、という自己制約を子どもは自然にもつていきますが、それに加えて私たちが、くしてはいけません、くをしなさい、と次々に要求してはならないと考えています。むしろ、子どもたち一人ひとりが自分の生活経験の中で、くしたらダメだったな、くしなくちゃならない、と気づいていることを私たちがしっかり読みとつていたいと思います。

たとえば、今までと同じように遊んでいるとみえるけれどこの頃ちよつと楽しんでいないなあと感じとることは私たちの役割です。これといって困ったことが起こらなくてもこれまでのような満



足感がないとき、子ども自身の力でその飽和状態を脱け出すことがなかなかできないこともあります。そのような時に一緒に遊びその子どもが何かを求めていることを感じとり、一緒にその方向やきっかけを探していくのは私たちの役割となります。

### 個人記録を始める

このようにして実現した遊び中心の保育は充実しているものの、日々流れてしまうような不安がありました。開園して五年が過ぎた公開保育のあと、平井信義先生から「こういう保育には個人記録が必要ね」とさりげない示唆が与えられたことは非常に幸運でした。

全園児に一冊ずつのファイルを用意した個人ノート記録は保育者全員が自由に書き、読むことができるひらかれた形式で始めました。その子らしいと感じたエピソード、その子らしくないと意外に感じたエピソード、家庭との関わりなど、その場面を取りあげたこと自体が記録者の観点となるわけですが、子どもの評価

ではなく行動の奥にある子どもの心の動きを知ろうとすることが共通理解されています。記録は一年に三回をめやすとして考察が行なわれ、保育者全員が聴いて意見を交換します。

### ボード記録の誕生

子どもの遊びが一人または二人の世界で展開していた時期から、次第にグループ活動となってひろがる年長児では記録が個人ノートだけでは不便であると感じることがあって、ボード記録が誕生しました。この記録の特徴は、一枚のボード上に年長児全員の活動を網羅できることです。子どもたちは一日の中でいくつかの遊びを点々とするため、ボード上には最も充実していると感じた活動を記録します。個人ノート記録のような克明な描写はできませんが、さまざま工夫が十二年の継続の中で積み重ねられました。

左のページの図は実際のボード記録です。

11月19日、木曜日、晴れ、午前中の年長児の主活動

午後 手つなぎ才二 泥棒と警察、劇割こ

公園 玉璋陣比

白
たかひる
うじたか
きんや
けいた
あきのり

ケリノボリに、赤の玉璋の  
陣比。後、か玉璋をたつら

当
ちづる
ちひろ
塚田
ゆきこ
見(ち)自(車)の(た)

見(ち)自(車)の(た)

お化け屋敷の お面(タ)
けいいち
こうかい
ゆうた
まじみ
ひろき

途中玉璋に  
誘いが、客は  
園に「お化け  
屋敷」使(お面)を  
使(お面)と(お化)け  
ている。ゆたが  
中心(お面)の(た)

赤

☆
ゆうじ
りょうじ
しやん
けんたろう
かつや
ごう
こうかい
ゆうじ
けいあけ
ごうし
たいち
あきこ

ざと見(た)が、赤(タ)が2回  
連続(タ)と「しよが(タ)と  
腰(タ)出(タ)る。白(タ)の(タ)と(タ)と  
い(タ)持(タ)は(タ)れ。

園庭
ままご
けんじ
さおり

公園

ままご
まみ
あおい
ねおな

ままご
だいき
こうだい
あひ

玉璋  
大島  
一(タ)公園(タ)を(タ)ラ(タ)れた。  
ま(タ)公園(タ)の(タ)動(タ)待(タ)れた  
の(タ)に(タ)。

当(タ)後(タ)一(タ)か(タ)玉璋(タ)と見(タ)れた。  
ゆ(タ)た(タ)と(タ)ゆ(タ)と(タ)しよ(タ)が(タ)3(タ)回(タ)が  
各(タ)か(タ)「しよ(タ)が(タ)入(タ)れ(タ)る(タ)ん(タ)ど(タ)に(タ)  
ま(タ)み(タ)相(タ)得(タ)れ(タ)た。

劇(タ)割(タ)こ

川原(タ)不(タ)同
さきこ
あきら
れみ
まいこ

ゆりあ
お容(タ)れ
あずさ
キイロ

ちひろ、お容、ちひろと  
一(タ)箱(タ)：遊(タ)木(タ)を(タ)使(タ)た(タ)ら(タ)ず  
玉璋(タ)に(タ)お(タ)容(タ)れ(タ)て(タ)く。

小集(タ)会(タ)室(タ)誕生(タ)会

池田
まご
あひ
まみ

ゆうあけ
たかあき

中間(タ)中(タ)池田(タ)：誘(タ)は(タ)れ(タ)れ  
「お(タ)容(タ)れ(タ)と(タ)あ(タ)ひ(タ)と(タ)あ(タ)き(タ)と(タ)は(タ)ら(タ)ず  
最後(タ)の(タ)お(タ)容(タ)れ(タ)と(タ)塚(タ)田(タ)と(タ)箱(タ)に(タ)お(タ)容(タ)れ(タ)て(タ)く。

11 / 19 (木 日)

☆7-7-7  
9月(タ)の(タ)園(タ) 年(タ)長(タ)集(タ)団(タ)の  
総(タ)合(タ)新(タ)動(タ)を(タ)経(タ)り(タ)園(タ)主(タ)任(タ)経  
任(タ)者(タ)を(タ)た(タ)と(タ)す。ゆ(タ)う(タ)が(タ)  
何(タ)れ(タ)目(タ)指(タ)さ(タ)れ(タ)る。油(タ)子(タ)が  
2(タ)回(タ)に(タ)た。

情報(タ)求(タ)ム

あけみ
たつき
はるか
まさき

の様子です。

隣接する公園で王様陣取りというゲームを楽しむ子どもが多くなっています。銀杏の木の下でお化け屋敷のお面作り、園庭でままごと、公園でままごと、つばめの部屋（保育室）で劇ごっこ、小集会室は秘密の部屋と呼ばれる所で来週ひらかれる誕生会のための活動が当番の子どもたちと保育者で行なわれています。

各々の活動に参加している子どもの名前は積極的に楽しんでる順に並べ、程度の差の無い時は「順不同」と付け加えています（例…劇ごっこ）。これは保育者が子どもの姿を評価している訳ではなく、活動への取り組みを振り返る時の手がかりとするものです。主活動とは時間的に長く続いた活動、熱中していたとみられる活動としています。記録の中に保育者の主観をできるだけ少なくするために、王様陣取りからままごとへの動きがあったことを矢印や文字で表示しています。「当」はその日の当番の子どもです。

保育者が意図をもっている場合に保育者の名前は子

どもの名の上に置き、子どもが始めた活動に保育者が入った場合は保育者の名前は子どもの下に置きます（例…王様陣取りの塚田）。ある子どもの気持ちに添って活動していく援助が必要と考えて遊びの中にいる保育者の名前は、その子どもの横に置きます。（例…王様陣取りの大島）。

☆マークは特に継続して注目し本児の姿を報告しあうために喚起を投げかける時に使います（例…王様陣取りのゆうじー途中入園）。午後の活動は簡単に欄外に記入します。メモは仲間関係に変化のあった場面や活動が始まったきっかけ、意図などです。劇ごっこの中の「ゆりな」は少し離れて名前を連ねています。メモによると、「ちひろ」「あきら」「ちづる」らと一緒に遊ぶつもりだったが王様陣取りになると抜けて劇ごっこの中へ入ったとあるので、劇ごっこが目指す活動ではなかったことを表現しています。「オレンジ」は年少児、「キイロ」は年中児です。活動の様子がどの保育者にもみえなかった子どもは「情報求む」と

し、「お休み」を含めて全年長児の名が記載されています。

当番の保育者が二週に一回の頻度で自分なりの観点を立てて記録を考察し、保育者全員に向けて発表します。

次にボード記録から子どもへの援助を討議した事例を紹介します。

銀杏の木の下でお化け屋敷のお面作りをしている五人は、この季節になっても他の子どもとの遊びの交流が少なく、今後に向けてどのような援助をしていったらよいか検討しました。まず、五人の子どもにとってお化け屋敷という活動がどのように楽しまれているか考えてみると、「けいいち」にとっては自分の発想したお化け屋敷ごっこという遊びを实らせたい場です。「こうへい」には居心地のよい仲間といられる場です。「まなみ」は王様陣取りをしたいけれど「こうへい」と「ひろき」から共にいたいと求められていま

す。「ゆうた」はリーダーシップをとっていたい人でメンバーは自分の思いが通る場となっています。

この頃、「まなみ」と「ゆうた」が王様陣取りに参加して自己発揮している姿がみられ、保育者はその姿を援助したいと考えました。五人の結束が崩れることは「こうへい」にとって一時的には苦しい経験であっても、そのことで主体的には物事に関わっていくきっかけとなるのではないかという意見です。

これに対し、一人ひとりが充実していることであり保育者が介入することを急がないのがよいという意見が出されました。「こうへい」は「まなみ」「ゆうた」が五人の輪から出て王様陣取りの活動をしようとして



いる気持ちをすでに感じとっているのだから保育者の意図によって仲間関係の変化を促すより、「こうへい」自身が「まなみ」「ゆうた」の気持ちを受けて自分も王様陣取りへ参加しようとする行動するか、残された環境で自分と向き合うかの葛藤に直面することを見守るのがよいという意見です。

この話し合いの結果「こうへい」を王様陣取りという大きい集団の中へ押し込め働きかけをしなかったことで、「こうへい」は自分たちの仲間の中の活動の面白さを追求していました。そして、仲間から受け容れられる実感を積むことで次第に仲間に対して自分の気持ちをはっきりと伝えるように変化してきました。自分の遊びを実現した自信が、今まで「できない」「やりたくない」と避けていた集団のゲーム活動に対して「楽しそうだな」と思うように変化してきました。それは「こうへい」自身が、一步を踏み出す力を自分のなかに培ったことであつたと思います。

この事例が示すように、ボード記録は集団の中の個の姿が見えやすくなると同時に、記録が連続性をもっていることによつて、これまでの活動を考察し、これからの援助を検討するための資料として確かな手がかりとなります。

個人ノートの考察が四ヶ月に一回程の間隔を置いてなされ、子ども個人の成長や変化を明らかにすることが多いのに対し、ボード記録の考察は隔週に行なわれ、子どもの中にあつて成長する五歳児の姿や問題をとらえていきます。

これら二つの記録は、遊びを中心とした保育を支える柱として、これからも私たちと共に育ち続けることでしょう。

(江東区・まんとみ幼稚園)